

事例研究による学校教育相談の効果的な在り方についての一考察

－思春期の課題をめぐって－

高知県立高知北高等学校 教諭 橋田 壮一

1 はじめに

高等学校の校務分掌として長年教育相談に携わってきたが、より専門的な研修が必要と考え、鳴門教育大学大学院 学校教育研究科 教育臨床コースで2年間研修を受け、学校教育相談の効果的な在り方について研究を行った。臨床心理学の分野での研修が主たる内容であった。実際に事例を担当してスーパーヴァイズを受け、ケースカンファレンスに自分の事例を出して多角的な検討を行い、精神科医や臨床心理士から指導を受けた。そのような実践から、実際の具体的な事例に対する対応能力を高めるトレーニングを継続的に行うことが、効果的な教育相談につながることを学んだ。

2 研究目的

実際の事例についての研修を受ける一方、勤務校の生徒に関わった事例を振り返り、細かく検討する事例研究を行い、そこから学校での教育相談活動に役立つ内容を見出すことを研究の目的とした。

3 研究内容

(1) 思春期の課題と不登校の現状

学校の教員が中核を担う学校教育相談にあっては、思春期の課題として、神経症的な不登校をはじめ、生徒のさまざまな神経症の状態にどうかかわるかということが、一つの大きな課題である。高校生の不適応という課題については、様々なレベルの問題から高校生の時点で結果的にそのようになってきているということもあり、困難な状況にある子どもに対しては、医療機関や相談の専門機関との連携が重要である。ここでは思春期の課題の理解を中心に、対応できると思われる問題に焦点を絞って考察を進めた。

問題を通じてこそ人間は成長するのであり、成長の節目、節目には何らかの問題が生じて当然ともいえる。思春期という時期が、人間にとって難しい時期であり、このときに少しぐらいの問題が生じても、後ほうまく乗り越えられることが多いということは経験的によく知っている人が多いのではないかとと思われる。

思春期において不適応を経験することはしばしばみられることであり、成績が急に下がったり、隠れてタバコを吸ってみたりなどのことがあっても、多くの子どもはそれを乗り越えていく。また、他人の視線が気になったり、少し過食になったり、お腹の調子が悪いことが続いたりしても、それは一過性のものとしてやがて収まってきたりする。そのような思春期の課題、大人になることを幅広い視野で見渡すとき、その問題による揺れが大きい場合に、外的な適応を崩して、不登校になり、家にこもったりすることが考えられる。大なり小なり、誰にでも思春期の壁は存在するし、それが表面で問題とされるか、表立った問題はなかったかのように、そこを通り過ぎていくかは、人によって、その現れ方が異なる。しかし、様々な苦悩を克服する努力をすることによって、はじめて子どもは成長する。そのような視点から、思春期の課題を大局的に理解することが、効果的な支援につながるのではないかとと思われる。

(2) 思春期の課題をめぐって

臨床心理学において、河合（2000）が示すように思春期の課題について、文化人類学の知見から、イニシエーション（通過儀礼）を重要視した視点が、人間理解に役立つことが知られている。学校現

場においても、子どもから大人への移行ということでイニシエーションを捉えることが生徒理解に役立つと考えられる。

現代社会で大人になるという成人式の儀式は形骸化しているが、伝承社会では非常に重要な意味を持っていた。高石（1992）によれば、前近代人に重要視された成人式においては部族の神話と伝承を学ぶことが必須であったが、それは単なる知識の教育ではなく、神の直接的啓示を受けることであった。それまでただ自然に俗的存在として生きてきた子どもは、儀式において心身の準備をし、有無をいわせぬ試練を与えられ、強烈な畏敬と恐怖の中で超越者を知り、超越者とのつながりを体験する。そこでは俗を生きていた少年は儀礼的な死を経て、精神的存在として、全く新しい宗教的資質を与えられた成人として生まれかわるのである。それがイニシエートされるということの本来の意味である。

ファン・ヘネップはイニシエーションの構造について研究を行い、①境界前(分離)、②境界上(過渡)、③境界後(統合)の3段階の構造になっていることを示した。伝承社会の大人になる儀礼の要素を大まかにまとめると、子どもは母親から離され、森の小屋に隔離される。ここでは祓いや飲酒酩酊などにより過去の忘却を促される。これが分離儀礼である。続いての過渡儀礼では、小屋の中で隠遁生活を送りながら呪術師により秘儀を教えられ、入墨や割礼などが施される。この間は食事などの生活上のタブーに服する。最後の統合儀礼では、沐浴し、小屋を焼き払って元の居住区に戻る。その際には時間をかけて日常生活に必要な行動を学び直して、もとの世界に返っていく。これらの儀礼の3段階は重なり合う場合や、どれかが強調される場合などがあり、厳密に分類できるわけではないが、ファン・ヘネップは通過儀礼における時空の境界の重要性を示した。居住地を離れて森に入ることも、俗から聖への境界を通過することであり、聖と俗の2つの領域の往復こそイニシエーションの本質であるということを示すものであった。

ターナーの理論はファン・ヘネップの理論から導き出されている。リミットは境界のことであるが、人間が普通に暮らしている日常生活は、様々な社会的立場や地位などの構造があり、いろいろな違いある人間によって構成され、それなりの秩序を保っている。ところが、人間が時にそういう日常生活の境界を超えて、リミナリティの世界（リミナリティ領域）に入ることの重要性をターナーは説いている。彼は通過儀礼の2段階目の過渡（境界上）の領域、即ち、リミナリティ領域に成立する人間関係の様式をコムナスと呼んだ。コムナスとは日常の社会構造の次元を超えた自由で平等な実存的人間関係であり、そのような人間関係に支えられて新たな変化が生じる場が、イニシエーションの中のリミナリティの時空であると考えられる。

河合（1983）が述べるように、現代でも個人として大人になる際にはその個人なりのイニシエーションが必要であり、それが執り行われる過程で、日常とは次元が違ったリミナリティ領域を潜り抜けることによって、精神性を獲得し、子どもから大人へと移行していく。その異なる次元に入った際に、子どもによっては症状としての神経症的な不登校などの様相が見られるのではないかと。リミナリティ領域で生じていることとして、引きこもりや昼夜逆転や対人恐怖などの症状を考えると、常識的な、単に悪く矯正されるべきこと、ネガティブなこととしてのみ捉える対応よりは、柔軟な対応が可能ではないか。成長のための助走的後退と捉えることが、支援する教員にとって役に立つと思われる。本研究では、そのような枠組みで見ることによって、生徒のさまざまな神経症の状態に対する理解が深まることについて考察した。

(3) 事例をめぐって

平松（2007）はユング心理学の目的論的な観点から、「不登校や非行など一般的には問題行動といわれているような不適応行動であっても、それらは単に困ったこと、人格発達の未熟性によるというものでなく、より高次の心の統合性を目指すための問題提起として起こってきたととらえることが出来る。子どもが症状を持つということは、その時点での意識の限界を越えて、さらに、より豊かな生き方をするための、その子ども独自の取り組みということである。このような考え方はきわめて教育的であると思われる。」と述べている。このような視点で、事例を見ると、新たな見方が出来ると考

えられる。不適応が起こってから、岩宮（2000）の言う「異界」の中に入るようなこもりの状態を経て、新たに社会に参入していく回復の過程は、通過儀礼のイメージと重なると思われる。

(4) 思春期のイニシエーション

ファン・ヘネップの言うイニシエーションの3段階の①境界前(分離)、②境界上(過渡)、③境界後(統合)を不登校の状態に当てはめ、①外的適応を崩して、家に籠る等の不登校、神経症的症状の始まりを分離、②こもっている状況や神経症に苦しむ状況を過渡、③神経症を脱し、登校できたり、教室に入れたりする状況を統合と考え、イニシエーションの構造が、神経症的な状態や不登校などからの回復ということと共通するのではないか。ファン・ヘネップのイニシエーションの3段階と神経症的不登校の状態の対比を表1に示す。それらの生徒は、なんらかの状況により、イニシエートされずにいたが、その時がやってきて、イニシエートされる方向に導かれる。それは単に傷が治るというようなことではなく、人格的な成長を伴い、前近代社会の成人式の儀礼、即ち、イニシエーションと共通するものがあるように感じられる。

(表1) ファン・ヘネップのイニシエーションの3段階と神経症的不登校の状態の対比

	イニシエーション (ファン・ヘネップ)	神経症的不登校
①	分離 (境界前)	外的適応を崩して不登校がはじまる。こもり始める。
②	過渡 (境界上、リミナリティ領域、コムニタスが生じる)	引きこもる。登校しようとしてもできない状態が続く。神経症的症状に苦しむ。
③	統合 (境界後、境界を越える)	登校できたり、教室に入ったりできるようになる。

②の境界上(過渡)の時空をリミナリティ領域と考えると、ターナーの言うようにリミナリティ領域には、共にイニシエートされる仲間の人間関係であるコムニタスが生じる。日常生活を壊さずに大人になっていく子どもたちは、何らかの形で、自由で平等な実存的人間関係の在り方としてのコムニタスを獲得し、それを契機に大人へとイニシエートされるが、そのようなコムニタスの得られない孤立した状況にある子どもは、リミナリティ領域に入るときに、社会適応を崩して、閉じこもったりする必要が生じるのではないだろうか。リミナリティ領域にあって、その子どもなりのやり方でコムニタスを体験することが、大人として再統合されることにつながると思われる。コムニタスが生じなければ、その人間は孤独になり、不安が強くなって、場合によっては、神経症状態に陥る。そのような仮説に立って、思春期の課題を考えると、生徒のことがよく理解でき、不安な苦しい状況の生徒の支援につながるのではないだろうか。

河合(1986)は「心理療法家は、聖なる性質を持つ空間に限りなく近接する態度をもち、身分体系から自由になって、謙虚な態度でクライアントに向き合わなければならない」と述べている。そのような態度は教員にも求められるものである。また、ターナー(1969)がリミナリティ領域について「死、子宮の中、不可視なもの、暗黒、荒野、日蝕、月蝕に喩えられる」と述べているのも、外的適応を崩して、境界上に在るという思春期的不適応に通ずるものがあると思われる。河合の言うように、近代社会以降においては、厳密な意味で、通過儀礼は放棄されており、儀礼を支える神や絶対的存在を欠いている。通過儀礼に似たものとして、日常生活と分離したカウンセリング場面などの空間において、クライアントがそれまでの自我を超えた体験をするということが、リミナリティ領域に入るということになる。

また、ターナーは、一般に社会というと社会構造と同一視されるが、社会は構造とコムニタスという両者の存在が必要であり、「構造とコムニタスという継起する段階をとまなう弁証法的過程」であ

ると述べている。それは、日本で言えば「ハレ」と「ケ」と似たようなものと考えられる。「ケ」が構造状態で、そこには社会的地位や身分があり、日常のある面で退屈なルーティーンが繰り返される。それに対して、「ハレ」がリミナリティ領域と考えると、それは、祭りであり、そこは日常性が解放される非日常の祝祭空間で、河合（2004）が述べるように、神輿が暴れ、無礼講の酒宴で身分や立場に関係なく、本音のやり取りがぶつけられるような場であると考えられる。構造と反構造の弁証法的過程が、人間社会の構造の本質と考えると、均質な俗なる時空が貫徹しているという現代社会のイメージでは社会構造の機能不全が生じる。それはデカルト的な無機的で均一な時間空間イメージであると考えられる。それらの問題から派生するものとして、思春期の神経症的問題も理解できるのではないだろうか。中沢（2000）の論旨から考察すると、見える世界に生きてきた子どもが、イニシエーションに直面し、見えない世界を含めたトータルな世界の前に立たされたときの、立ちすくむような恐怖、畏れが神経症を生じさせるということかもしれない。

コムニタスに参入することができず、日常の構造のみを生きていると、不登校生徒自身が自分でも理解できないような、学校に行こうとしてもいけない、教室に入ろうとしても入れないというような、神経症的状况が生じることは、可能性としては大きいと思われる。

ターナー（1969）は、また、「私はいまでは、コムニタスは生理的に継承された衝動が文化的抑制から解放されてつくる単なる所産ではないと考えるようになった。むしろそれは、合理性、決断力、記憶力など社会での生活経験とともに発達する人間に特有な能力の所産であると思う」と述べている。このような人間が生きのびていくための英知を、近代以降の社会は忘れている。孤立し仲間とコムニタスを体験できない、イニシエートされない人間の苦しみは、そのような英知を見失ったところから来ると考えられる。伝承社会に戻ることはできない現在、そのようなことをふまえて、伝承社会から近現代社会までの人間社会を包括する視点を持って思春期理解を進めなければならないと思われる。河合（1976）は「消え失せたはずのイニシエーションが、近代人の無意識の中に生命を持ち続け、ある個人にとって、ある成長段階において、その人にとってのイニシエーションを演出することがユング派の分析家によって明らかにされた。多くの人はその夢の中で『母親殺し』や『父親殺し』『死と再生』などの体験をし、その体験を通じてイニシエートされてゆくのである」と述べている。

(5) イニシエーションとしての不登校

児童精神科医の河合洋（1986）は自ら関わったおよそ 200 例の不登校事例の予後調査を行い、約 8 割が社会適応を果たしており、そのような意味では思春期に一過性の困難ととらえることが出来ると述べている。筆者も生徒の体験を聞くと、多くの生徒から、あの時は、眠るしかなかったとか、どうしても学校に行けない、家から出ることが出来なかったし、どうしてそうなのかもあまりはっきりしなかったという話があった。河合洋（1986）は「多くの、一見消極的、受身的に、元気がない姿で『登校拒否』をつづけていた子ども達は、後年、振り返って、『あのときは、あのようになるしかなかった』と述べるのが圧倒的に多い。この言葉の持っている意味は、しかし大変に重いものを含んでいるように感じられる」と述べ、更に、現代の高学歴社会の社会規範からすれば、不登校は逸脱行動であり、矯正されるべき行動として常識的に対応されることで、不登校の子どもは心理的に追いつめられ、罪悪感を押しつけられ、打ちひしがれていくと述べている。

上の記述の中にも「あの時はあはするしかなかった」という子どもの体験談があるが、これについては、イニシエーションの時点で立ち現れるリミナリティ領域に入っていたというような捉え方も、ある程度できるのではないと思われる。常識のみで捉えられる次元とは違った次元に子どもが置かれていると見ることはできないだろうか。岩宮（2000）の言う「異界」のような次元に入るということである。ある中学時代に不登校を経験した女子生徒はその当時流行っていた結界を張るという言葉にインパクトを感じると述べた。また、ある女子生徒が、不安定な時期に、多くの教師が自分を避けている中である教師が結界の中に入ってきて手を差し伸べてくれたことを感謝していると言ったことが印象深い。また、別の中学時代に不登校であった女子生徒は、夢を見た話で、皆が並ん

で順番に耳たぶに穴を開けているが、私はその列に入ることが出来ないという場面が印象的であると述べた。伝承社会で成人式の儀礼に入墨を入れる試練が与えられることと共通するようなイメージで、これも、自分だけイニシエートされないという感じが出ている夢であると思われる。儀礼の中で、リミナリティ領域において、共に儀礼を通過する仲間の人間関係としての同世代のコムニタスに入れないうことである。

また、筆者の倫理の授業の感想で、ある女子生徒は「中退して、今の学校に編入することになり、4月当初最初の1週間ぐらひは、緊張して話しかけられても、うまく話が續かなかつたりで、3日ぐらひは学校に行きたくなかつた。けれど、どういふわけか、急に、当たつて砕けろといふ考え方に、気持ちが変わつた後は、結構、友だちも出来、そこそこ楽しくやつてゐる。難しいことではあるが、自分の気持ちの持ち方一つで、自分の生き方は変わると思つた」と書かれてあつた。これを読んでこの生徒に「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」といふ言葉が浮かんだと感想を書いたことがあつた。これも伝承社会の成人式でバンジージャンプ台から飛び降りるようなイメージと似てゐるのではないか。イニシエーションのような体験をよく表現してゐると感じた。

山中(1978)は思春期を「さなぎ」の時代ととらえ、しっかり殻に守られて過ごすことの意味について述べてゐる。また、その中で何年か續く「夜の航海」の後に光の世界に漕ぎ出していく不登校の子どもたちが「夜の航海」のことはなかなか思い出せないし、その只中であつては、自分でも自分のことが訳が分からないといふことを述べてゐる。これもリミナリティ領域に入りこんでゐる状態は、日常の状態とは違つてくることを示してゐると考えられる。

伝承社会では、入念な演出により、成人式が執り行われ、子どもに実存的な転換がおこり、別人の大人として、社会に受け入れられていたが、現代社会では、ターナー(1969)が言うようにイニシエーションに対して、伝承社会と異なり、「刺激も保護も制度化されてゐない」ので、子どもは、自分でもわけのわからないまま、周りから見ると急に不登校になつたり、家にこもつて昼夜逆転の生活を送るよふになつたりすることになる。そのよふになることについて、社会的な保護はなく、問題視されるのみであるのが、今の社会の現状である。

更に、一時期、社会的適応を崩してゐたことについて後で振り返ると、マイナスばかりではなく、そこにプラスの意味を見出してゐるといふことが勤務校の多くの生徒の話に示されてゐる。神経症的な状態から立ち直ることは、思春期の課題を、少しずつ繰り返して試行錯誤しながら、「大人になること」を成し遂げていったとも捉えられるのではないだろうか。

(6) 閉じこもつてゐる生徒への訪問による支援

かつて郡部のある普通科高校で、部活動顧問としてかかわりのあつた1年の女子生徒が、夏休みのコンクールまでは真面目に部活動にも参加してゐたが、2学期になつて登校できなくなり、それから毎週1回山の中にあるその生徒の家を訪ね、玄関で少し言葉を交わすよふなことを3月まで續けた。

顔を見にきたと告げると、遠慮がちに玄関に出てきて、こちらの言葉にうなづくぐらひのやりとりであつた。その生徒は退学し、後に通信制高校を経て、都会の専門学校に入り、そこを卒業して就職した。退学以降は季節の便り程度のつながりであつたが、その生徒が、友人と二人で撮つた振袖姿でにこやかな表情の成人式の写真を送つてくれて、その手紙の文面に、「5年前に今のこの私の姿が想像できたでしょうか」と書かれていた。不登校になつたころ、母親との話の中で、娘が海底のヒラメの絵を描いてゐるといふ報告があり、まさに海底にへばりつくヒラメのよふな日々を送つてゐるといふことが想像されたが、成人式を迎えた手紙を読んで、時を経て、白雪姫の物語などに象徴されるよふな、眠りによる成熟の課題を達成したのではないかといふ感慨を抱いた。

教員に不登校対応についての理論がないと、継続的な訪問による関わりは續かないと考えられる。不定期に、その都度訪問して一喜一憂してしまい、見通しが持てない。スクールカウンセラーのコンサルテーションなどによつて、理論的な支援を得てはじめて、訪問を續けることが出来るのではないか。育ち直しの可能性に賭け、繰り返される週1回、月1回などの内的な周期を捉えてかかわること

が人間の成長につながるということを理解し、定期的に会い続けることを家庭訪問などで実践することも、教員のできる支援の一つであると考えられる。

比喩的に眠る白雪姫と生徒の引きこもりを対比させてみると、次のような理解が得られると考えられる。白雪姫と7人の小人の話で、白雪姫が、小人のところに逃れてくることはファン・ヘネップの分離、過渡、統合の過程でいうと、分離に当たると思われる。その後の過渡の時期に、小人の隠れ家で守られ世話をされていると、毒りんごで眠ってしまい、それを小人たちは心配して見守り続けるという展開は、眠ることによる思春期の成熟過程を象徴したものと解釈ができるであろう。過渡、即ち、リミナリティ領域にはいつている白雪姫を心配しながら守り、世話を続ける小人たちのような存在を、閉じこもっている生徒に関わる教員が継続的な訪問によって担うということもそのように理解されるのではないだろうか。イニシエーションに直面した子どもが、それまでの生きることについての理解を超えた大人の世界の前に立たされた時の、立ちすくむような恐怖を理解し、その恐怖が緩むまで、そこに寄り添えることが支援につながると思われる。

4 まとめ（今後の課題）

イニシエーションの時点で立ち現れる時空をリミナリティ領域、そのリミナリティ領域における人間関係をコムニタスということにとらえると、ターナー（1969）が言うように、社会は構造とコムニタスという両者の存在が必要であり、「構造とコムニタスという継起する段階をとまなう弁証法的過程」であるという人間が生きていくために必要な英知をイメージすることは優れて現代に生きる人間の課題であるということが言えるであろう。

スティーン・キングの原作によるアメリカ映画「スタンドバイミー」（1986）で、主人公たちの少年グループの秘密の旅の中で、自分の弱さを吐露する親友との語らいの場面が出てくるが、それはコムニタスのイメージを喚起する。日常生活を壊さずに大人になっていく子どもたちは、何らかの形で、その人間関係のどこかにコムニタス状況を獲得し、それを契機に大人へとイニシエートされるが、そのようなコムニタスの得られない孤立した状況にある子どもは、リミナリティ領域に入るときに、社会適応を崩して、閉じこもったりする必要が生じるのではないだろうか。リミナリティ領域にあって、その子どもなりのやり方でコムニタスを体験することが、大人として再統合されるイニシエーションにつながると思われる。コムニタスを体験する人間関係の場が、生徒によっては適応指導教室であったり、定時制通信制高校であったりする場合が考えられる。

日常世界の構造を超えて、リミナリティ領域に入ることを弁証法的に繰り返すことが、人間が生きる知恵であると考え、現代社会において、そのような構造から反構造への転換は少なくなっていると思われる。それだけ構造は硬直化し、そこでは、リミナリティの世界に入れないうまま、心が干からびて、人間の現実適応を崩させてしまう。

成人式などのイニシエーションが形骸化し、実質的に大人になる刺激も制度も保障されず、いまだイニシエートされないままにいる子どもに、周りの守りのない状態で、自らの力のみで、それが求められ、その際に、場合によって現れる現象として、学校に行けなくなったり、昼夜逆転の生活を送ったり、こもったりする状況があるのではないか。

そのような中で、学校教育相談を推進する教員が、リミナリティ領域について理解し、それを日常的に前進する学校とは次元の違ったリミナリティの中に子どもが置かれている状況であると捉えると、援助の大きなヒントになると考えられる。

河合（2004）は「ターナーは人間は英知として、そのような構造と反構造の弁証法的展開を理解し、儀式や祭として伝承社会で生きることを刺激され制度として保障されていたということを示した。今はそのような意味での命のかかったような儀式は消失している。そこにカウンセラーの仕事の必要性がある」と述べ、更に、「それによってリミナリティの世界にクライアントと一緒に住んで時間を過ごすことは大変なエネルギーのいる仕事である」と述べている。学校で教育相談の係として活動する

教員もそのようなことについて知ることにより、不登校などの適応を崩した思春期の児童生徒に対して、より効果的にかかわる可能性が開けると考える。

勤務校には中学校時、適応指導教室で過ごした生徒が多数いたが、彼らは適応指導教室の教員が見守る中で、仲間と出会い、成長し、元気になっていた。不登校があったから、今の自分があると語る生徒は、一般的にはマイナスの体験として捉えられる不登校の中に、その生徒にとってプラスの意味を見出していると感じる。

物質的に豊かな世の中になり、便利な生活がさらに進む過程で、人間関係が希薄になり、孤立化が進む生徒の状況がある。そのような中で、濃密な人間関係の支えによってイニシエートされる体験の場を、教員の立場でどのように確保できるかと考えると、学校の在り方の一つの側面の重要性に気付かされる。リミナリティ領域を醸し出すようなことが学校のどのような場面で可能かということを考えて、部活動や生徒会活動などさまざまなグループ活動もそれが良い方向で濃密な人間関係につながる場合は意義深いと思われる。定時制通信制高校や適応指導教室のような、人間関係を生み出す場の存在も、その生徒にとってその場が仲間関係に支えられる体験の場になることが、生徒の成長を促進することにつながると思われる。

その際に、教育相談担当教員がイニシエーションについて知っていることが、事例を見通す鍵になるとと思われる。更に、教育を考えると、知識を教えるということは大切であるが、知識を教え込むということばかりになると、学校社会は日常の構造のみが支配する場になって行き詰る。日常の構造と、非日常のコミュニティの弁証法的過程が学校にも必要で、それによって活性化されるという原理を理解した上で教育活動に取り組むことが求められる。人間関係で孤立した生徒がコミュニティに参入できる過程を支援する学校教育相談担当教員の役割が再認識される。

人間が群れで生きてきたことを考えると、群れることによって元気になることが一つの人間存在の在り様であり、孤立した生徒が、信頼し自らをゆだねることができる人間関係を獲得できた時に初めて、イニシエートされる足がかりができると思われる。

今後はそのような心理臨床の知について学校教育相談を推進する立場から、更に視野を広めていくことが課題である。それが、真の生徒支援につながる一つの方向性であると思われる。

(引用文献)

- 平松清志 2007 学校現場における箱庭療法 臨床心理学 42 金剛出版 777-781
- 岩宮恵子 2000 思春期のイニシエーション 河合隼雄編 講座心理療法1 心理療法とイニシエーション 岩波書店 105-150
- 河合隼雄 1976 母性社会日本の病理 中央公論社
- 河合隼雄 1983 大人になることのむずかしさ 岩波書店
- 河合隼雄 1986 心理療法論考 新曜社
- 河合隼雄 1991 生と死の接点 岩波書店
- 河合隼雄 2000 〈総論〉イニシエーションと現代 講座心理療法1 岩波書店 3-18
- 河合隼雄 2004 深層意識への道 岩波書店
- 河合 洋 1986 学校に背を向ける子ども NHK ブックス 507 日本放送出版協会
- 中沢新一 2000 (対談) イニシエーションの知恵 中沢新一+河合隼雄 河合隼雄編 講座心理療法1 心理療法とイニシエーション 岩波書店 191-217
- 高石恭子 1992 通過儀礼 氏原寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕(編) 心理臨床大事典 培風館 1077-1079
- ターナー 富倉光雄(訳) 1976 儀礼の過程 思索社
- ファン・ヘネップ 綾部恒雄・綾部裕子(訳) 1977 通過儀礼 弘文堂
- 山中康裕 1978 思春期内閉 中井久夫・山中康裕編 思春期の精神病理と治療 岩崎学術出版社